

國分功一郎氏の学位請求論文『スピノザの方法』は、スピノザにおける「方法」の諸問題に着目しつつ、『知性改善論』から『デカルトの哲学原理』を経て『エチカ』へといたるスピノザ哲学の展開を体系的に跡づけたものである。本論文は序章と結論を除いて三部から構成されており、第一部に二つの章が、第二部に三つの章が、第三部に二つの章が、それぞれ配置されている。ここではまず、この構成に則して本論文の内容を略述する。

序章では、「スピノザの方法」という本論文の主題が明示されるとともに、この主題にかかわる主要な先行研究がサーベイされる。それを受けた第一部は『知性改善論』に焦点を当て、スピノザによってなされる方法の説明を検討することによって、そこにいかなる問題が孕まれているのかを明らかにしている。筆者はここで、スピノザの方法探究の根幹にあるものとして無限遡行とその回避(方法の探究には探究のための別の方法が必要であり、この別の方法を探究するためにはさらに別の方法が必要であり、と、無限に遡及を繰り返す論理とその回避)を見ている。そして、研究者ヴィオレットが『知性改善論』の読解に当たって提起した「創出された方法」と「創出的方法」という対概念を援用しつつ、『知性改善論』における「方法」が精神の活動に先立って存立しうるものでないこと、にもかかわらず同書においては、あらかじめ定立された「方法」による精神の活動の指導と制御が期待されていることを指摘し、これを「方法の逆説」として定式化する。それとともに、「方法」が精神の活動に先行しえない以上、あらかじめ方法について論ずるという挙措も成り立ちえないことを指摘し、これを「方法論の逆説」として定式化する。これにより筆者は、スピノザの方法の解明という本論文の主題を、方法をめぐるこうした二つの逆説の解決として再定式し、本論文の問題構成を明確化している。

続く第二部は、スピノザの方法が精神の活動のなかでも観念の獲得と導出にかかわっていることに注目し、スピノザの観念思想の解明へと歩を進める。『知性改善論』の分析から、スピノザの観念思想がデカルトのそれとの対峙の上に形成されているという着想を得た筆者は、ここにおいてスピノザがデカルト哲学について論じた書物である『デカルトの哲学原理』を取り上げ、それに詳細な分析を施している。これにより筆者は、スピノザがデカルト哲学に顕在する論理を参照しているのみならず、デカルト哲学にそれと明示されていない潜在した論理をも引き出して、デカルト哲学の再構成に当たっていることを明らかにしており、こうした解明の作業を通じて、デカルト哲学の再構成に示されるスピノザ独自の哲学的志向性を二つの点に見いだしている。一つは、デカルト哲学が課題としていた懐疑論者の説得というモメントをスピノザが削ぎ落としており、真理の真理性は真理を獲得した者におのずと知られるとしたことである。もう一つは、デカルトが観念を何ものかの表象と見なし、したがって観念の原因をこの外在する何ものかに求めたことに対してスピ

ノザが批判的な見地に立っており、観念の原因を観念の外には求めないという脱表象論的観念思想をいただいていたことである。

このような論旨展開にもとづき、第三部で筆者は、スピノザ独自のこの観念思想がいわゆる平行論と一致することを確認しつつ、『エチカ』の分析へと進み、こうした哲学的立場が『エチカ』における「神＝無限に多くの属性を有する実体」の考え方によって基礎づけられることを論じている。そしてそれを通じて、『エチカ』が先に定式化した方法の逆説ならびに方法論の逆説を解決してみせる哲学的実践となっていることを論証する。それによると『エチカ』は以下の二点を具現化している。第一は、知性が観念を獲得し、観念を導出するのではあるが、知性はこうした作用を営むその場にあつて、知性自身に内在する法則にもとづいてそうするのであり、知性の活動は知性自身によって内在的に指導・制御されることである。これは方法の逆説の解決を構成する。第二は、知性が観念を獲得し導出するにつれて、知性はその歩みとともにみずからに内在する法則をも同時に理解するのであり、いわば方法の実践的適用と同時に適用されている方法についての理解が示されることである。これが方法論の逆説の解決を構成する。筆者はさらに、『エチカ』第一部冒頭の諸定理の証明手続きを克明に分析することを通じて、方法をめぐるとこのような哲学的姿勢を基礎づける神観念がいかにか構築されているかを論じ、『知性改善論』に懐胎されていた矛盾が『エチカ』によって乗り越えられる事態をさらに説得的に示している。

結論において筆者は、スピノザの方法が知性がみずからに内在する法則を理解していくプロセスに存することから、最終的にはそれが教育に結びつくことを論じ、スピノザの方法概念はスピノザの教育理念にほかならないという論点を提起して、本論文を閉じている。

以上の内容と構成を有する本論文の学術的な意義は、次の二点に集約される。第一は、従来のスピノザ研究において正面から論じられる機会のあまりなかった『デカルトの哲学原理』を主要な題材の一つとして取り上げ、それに精緻な分析を施しつつ、デカルト哲学との連続性と差異性の上にスピノザ哲学の位置づけを図ったことである。スピノザ哲学をデカルト哲学という光源によって照らし出す研究はこれまで本格的になされていたとはいえないため、この点で本論文は独創的な貢献をなすものと言える。第二は、『知性改善論』、『デカルトの哲学原理』、『エチカ』というスピノザの三つの著作を順を追って検討するに当たり、「方法」という概念を基軸に据えたことによって、そこにある一貫した論理の体系とその展開を見いだしたことである。とりわけ、デカルト哲学からの照射によってスピノザ哲学に独自の観念思想を取り出し、それを「方法」概念の考察に組み入れることで、『知性改善論』を起点として『エチカ』へと結実するスピノザ哲学の大きな流れが説得的に示されたことの意義は大きい。

また、本論文はときに禁欲的とも思える粘り強い思考をもってスピノザの諸テキストに分け入り、内在的な読解を施すことをその本領とするものであり、テキストに対するこの内在的な姿勢は本論文の全体を通じて一定の成功を収めているものと評価される。他方でまた、本論文は先行研究を適宜参照し、先行研究がなした貢献を踏まえながら、そこに疑

問や問題点を見いだして論を進めるといふ立論の体裁もとっており、本論文が全体として明快で手堅い論旨展開に裏打ちされていることも高く評価される。

もちろん、本論文に不十分な点があることもまた確かである。審査の席では、以下の点が指摘された。「脱表象論」、「イメージ」、「自律」といった筆者の設定した用語や、「分析／総合」といった概念枠組みについては、吟味や理解が些か性急であり、より入念な検討が望まれること。『知性改善論』が「方法」をめぐる分裂した性格を呈し、そもそも書物としては未完に終わっているという事実それ自体を焦点化する必要があること。デカルトに見られる説得のモメントがスピノザには見られないとする主張は、他者の理解を求め、他者の地平に応じるといふスピノザの姿勢に鑑みると、より詳細な検討を要すること。デカルトとの対比でスピノザを理解しようとした結果、また、とりわけデカルト哲学研究に関する基本文献の参照が足りないことも相俟って、デカルト哲学の意義が過小評価される傾向にあること。スピノザのテキストに内在的に則そうとするあまり、スピノザの論と筆者自身の論との区別がときに曖昧となるきらいがあること。16～17世紀にかけての西洋哲学において、真理の獲得と主体の関係に変動が生じたことを踏まえると、「方法」をめぐるスピノザの姿勢はどう位置づけられるのかを踏み込んで考察すべきこと、などである。

しかしながら、以上のような諸点は筆者の今後の研究の進展や概念枠組みの精緻化によって乗り越えられるべきものであり、本論文の基本的な価値を損なうものではないと本審査委員会は判断した。したがって本審査委員会は、本論文提出者が博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいものと認定する。